

聖書：ヨハネ 15：1～11

説教題：ぶどうの木と枝

日時：2020年2月2日（教会設立61周年朝拝）

毎年、教会設立記念礼拝では「教会」について御言葉から学んでいます。「教会とは何か」と問われたら、皆さんからまず出て来る答えは「教会はキリストのからだである」ではないでしょうか。キリストは教会のかしらであって、教会はそのからだであるというたとえばエペソ書、コロサイ書、コリント書などのパウロ書簡に出て来ます。これはキリストと教会の有機的な関係、生命的結合の関係を表しています。このたとえのヨハネ版が今日取り上げる「ぶどうの木と枝」のたとえと言えるのではないのでしょうか。これもキリストと教会の有機的な関係を表すたとえです。この箇所からキリストと教会の関係について学ぶとともに、教会が召されている歩みについて改めて考えて行きたいと思えます。

1節に「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫です」とあります。ここでイエス様のことが「まことのぶどうの木」と言われていることの意味は何でしょうか。背景にあるのは旧約聖書でぶどうの木はイスラエルを象徴するイメージとして用いられて来たことです。詩篇 80 篇 8～11 節：「あなたはエジプトからぶどうの木を引き抜き異邦の民を追い出してそれを植えられました。その木のためにあなたが地を整えられたのでそれは深く根を張り地の全面に広がりました。山々もその影におおわれました。神の杉の木もその大枝に。ぶどうの木はその枝を海にまで若枝をあの川にまで伸ばしました。」これは神がイスラエルというぶどうの木を約束の地に植え、これを育てる働きをして来られたことを表しています。しかし旧約の歴史を見ると分かりますように、イスラエルは神が喜ぶ実をならすぶどうの木になりませんでした。今読んだ詩篇の少し後の 14～16 節：「万軍の神よどうか帰って来てください。天から目を注ぎご覧になってください。このぶどうの木を顧みてください。あなたの右の手が植えた苗とご自分のために強くされた枝とを。それは火で焼かれ切り倒されています。民は御顔のところがめによって滅びています。」彼らは偶像礼拝と不従順によって自らに滅びを刈り取りました。エレミヤ書 2 章 21 節：「わたしは、あなたをみな、純種の良いぶどうとして植えたのに、どうしてあなたは、わたしにとって、質の悪い雑種のぶどうに変わってしまったのか。」このようにして旧約におけるぶどうの木は神の御心にかなうものとはなりません。しかし神はご自身の計画を投げ捨てられませんでした。今見た旧約の歴史を背景と

して、ここでイエス様こそ「まことの」ぶどうの木であると言われています。神の御心に全くかなう、神の御心と一致する、神が喜ぶぶどうの木。このようなぶどうの木があるということが、この世界にとっては慰めであり希望です。そしてこの後見るように、この方とのつながりを通して、その弟子たちも、また私たちも、まことのぶどうの木の一部としていただけるというのがここにあるメッセージです。

そのために父なる神がなさることが2節にあります。2つのことが言われています。一つは「わたしの枝で実を結ばないものはすべて、父がそれを取り除く」ということです。6節でも同じようなことが言われますが、いのちある木につながっているようでありながら、実を結ばない枝は、そのことによっていのちある木に真の意味でつながっていないことを示しています。そんな「死んだ枝」をつけていても良いことは何もありません。そこでそれを取り除く。これは現実に当てはめて言えば名目だけのクリスチャン、表面的には教会につながっていても真の意味でそうでない者を父が取り除くということの意味します。もう一つは、神は実を結ぶ枝に対しても刈り込みをするということです。もっと多く実を結ぶようになるためです。生きている木にとって、農夫がある日、手に光るハサミを持ってジョキジョキと刈り込んで来ることは大変なことです。しかしその刈り込みによって収穫の日には立派な実を豊かに結ぶようになる。神はそのように私たちが豊かに実を結ぶ者となるために刈り込みをなさいます。様々な試練や苦しい状況を用いて不要なものをそぎ落とし、信仰の光がいよいよ輝くように、益々イエス様にこそ信頼を置いて実を結ぶ者になるように働いておられるのです。

そして3～6節に私たちがまことのぶどうの木に結ばれている枝であることが語られています。ここにキリストと教会の関係についての素晴らしい真理があります。それは木と枝に流れているいのちは一つであるということです。それは同じもの、同質のもので、ですから私たちがまことのぶどうの木であるイエス様につながれているなら、私たちに流れて来るいのちは何とキリストご自身の内に流れているいのちと全く同じなのです。キリストはご自身が持っているいのちの一部分だけを私たちに分け与えるのではなく、ご自身が持つすべてを分かち合ってくださいなのです。

このことを覚えて私たちはキリストにとどまって生きるように！とされています。4節に「枝がぶどうの木にとどまっていなければ、自分では実を結ぶことができない」とあります。切り離された枝は、それ自身の内にいのちを持っていません。切り離され

た直後はまだ養分が残っていて花をつけることがあっても実を結ぶことは決してありません。5節後半にも「わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。」とあります。イエス様に頼らずしては、永遠に価値が残る働きは何も私たちにはできない。ですからキリストにとどまり、まことのぶどうの木から豊かな養分を受け取って多くの実を結ぶ者となれ！とされています。ところでここで言われている「実」とは何のことでしょうか。これはキリストと結ばれて私たちの内に生み出されるすべての良きものと言って良いと思います。それは一つにはキリストに似た性質と言えます。ガラテヤ書5章22～23節に御霊の実として「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」があげられています。これらは私たちがキリストにつながることによって私たちの内に結ばれて来る実です。また内側の性質が変えられることによって外側に現れて来る具体的な生活も指します。バプテスマのヨハネが洗礼を受けにやって来た人々に対して「悔い改めにふさわしい実を結びなさい」と言った時の「実」とは、そういう意味でしょう。またキリストに従う生活によって得られる様々な結果、伝道の働きの結果なども含むでしょう。教会はこのまことのぶどうの木なる方と結ばれて豊かなのちを受け、豊かに実を結ぶ祝福に生きるように召されている者たちです。

ではキリストにとどまるとは具体的にはどうすることなのでしょうか。そのことが7節以降でもう少し詳しく語られています。ただぶどうの木と枝をイメージして、イエス様とつながっているような気持ちになればいいのではないのです。ここに大きく3つのことが言われています。一つ目は「キリストの言葉」との関係です。7節に「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまっているなら」とあります。つまりキリストにとどまるとはイコールキリストの言葉が私たちの内にとどまっていることだと言われています。ですからキリストにとどまることを求める人は、キリストの言葉が自らの内にとどまるようにしなくてはなりません。今日で言えば聖書を慕い求めて読み、これを心にしっかり貯えること。日曜の礼拝でみことばをしっかりと聞くだけでなく、日々自分でも聖書を開き、御言葉が自分の心にとどまるように取り組むこと。これがキリストにとどまることであり、キリストから命が流れて来て実を結ぶことへと至る第一条件です。

2つ目は祈りです。7節後半に「何でも欲しいものを求めなさい。そうすれば、それはかなえられます。」とあります。一見、すごい約束だと思います。本当に欲しいものは何でも求めて良いのか。本当にそれはかなえられるのかと思うかもしれません。しか

しこれは自分の思うままに、神様あれください、これくださいと祈れば、それがかなえられるという意味ではありません。直前に「キリストの言葉がとどまっているなら」とありました。キリストの言葉がとどまっている人はキリストの思いと離れたお祈りはしません。その人は御言葉に一致する祈り、すなわち御心にかなう祈りをするはずです。その祈りが聞かれるのです。こうして「多くの実を結ぶ」と8節にあります。ここから改めて実を結ぶために「祈り」が欠かせないことを教えられます。御言葉に導かれて実際に祈ること、それが多くの実を結ぶための秘訣であると言われています。そしてその実をもって父なる神に栄光が帰されるようになります。ここで心に留めさせられたいことは、父なる神に栄光を帰すとは、ただ私たちが口で賛美歌を歌ったり、ハレルヤと言えれば良いのではないということです。ここで言われているのは私たちの実が結ばれる生活を通して神に栄光が帰されるということ。私たちは自分の生活が変えられ、良き実が結ばれて、父なる神に栄光が帰されることを目指さなくてはなりません。そのために「祈り」が欠かせないということが言われています。

3つ目は9～10節にありますように、イエス様の愛にとどまることです。9節：「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛にとどまりなさい。」ここから私たちは壮大な愛の世界に招かれていることを改めて覚えさせられます。父なる神の御子キリストに対する愛を一体誰が測り知ることができるでしょう。それは永遠、無限、不変の愛です。その御父の御子に対する愛と同じ愛で、イエス様は私たちを愛してくださった。この時は十字架前夜、間もなくイエス様は捕らえられ、次の日の朝には十字架にかけられるという時でした。イエス様はこれまでの幾多の戦いを経て、ついにここまで来てくださいました。わたしはあなたがたを愛しました！と言い切ることができる歩みをささげてくださいました。そのわたしの愛にとどまりなさいと言われていきます。それは具体的にどうすることでしょう。それは次の10節から「イエス様の戒めを守ることによって」と分かります。イエス様の愛にとどまるとは、イエス様に愛されているな～という雰囲気浸って歩むことではなく、イエス様の戒めに従う生活のことだと言われています。これはもちろん私たちの従う生活がイエス様また神様の愛を勝ち取るという意味ではありません。私たちが戒めを守るのはイエス様また神様を愛しているからです。14章15節：「もしわたしを愛しているなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。」愛があるので、戒めを守るのです。愛に動機づけられて戒めを守るのです。そして実際にそのように歩む時に、イエス様の愛の中にとどまると言われています。私はイエス様に愛されていると喜びながらイエス様に従う歩みを実際

にしていない人は、イエス様の愛の中にとどまっているということにはなりません。イエス様はここでも父なる神とご自分の関係を引き合いに出しています。イエス様も父なる神を愛し、その戒めを守ることによって、神の愛の中にとどまっています。それと同じように！とされています。

そして最後に注目したいのは 11 節です。イエス様はここで「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのはなぜか」ということを語っています。ある意味で長々と、豊かな内容が詰まっている言葉をこれまで語って来られた理由は何か。それは「わたしの喜びがあなたがたのうちにあるようになるため」とされています。「わたしの喜び」とは何でしょうか。これはイエス様が持っている喜び、イエス様の内に満ち満ちている喜びでしょう。その喜びとは、イエス様が父なる神を愛して、その戒めを守り、神の愛の中を歩む中で持つておられる喜びです。ここから分かることは前の節で言われた「戒めを守る生活」は「喜び」とセットであるということです。実に神を愛し、その戒めを守り行う生活に真の喜びがある！ということイエス様は仰っています。詩篇 40 篇 7～8 節：「今私はここに来ております。巻物の書に私のことが書いてあります。わが神よ私はあなたのみこころを行うことを喜びとします。あなたのみおしえは私の心のうちにあります。」これは新約聖書のヘブル書 10 章でイエス様に帰されています。イエス様は父なる神の戒めを守ることによって父なる神の愛の中にとどまり、そこにおいて限りない喜びを抱いておられました。この喜びがあなたがたにあるように！あなたがたもこの祝福に生きるように！とイエス様は言っておられるのです。

私たちはどこに喜びを見出そうとしているのでしょうか。私たちはもしかすると、神の戒めに従う生活は喜びとは反対のことであり、むしろそこから離れて自分のしたいことをすることが喜びと思っているかもしれません。神とは特に関係がない趣味や娯楽に没頭することが実は自分にとって一番の喜びであると。そのように考えて私たちは戒めに従うことを何か嫌なことのよう考えたり、優先順位において後回しにしていることはないでしょうか。しかしイエス様は、わたしの喜びは神の戒めに従い、その愛にとどまる歩みの中にこそあると言っています。このわたしの喜びをあなたがたも知る者となるように！しかもそれが単にあるという程度でなく、満ち溢れるように！完全なものとなるように！と言っています。地上にある間、私たちは不完全ですが、イエス様に結ばれて、この真の喜びにいよいよ生きる者となるように！と、その枝である教会は招かれているのです。

私たちは改めて今朝、イエス様がまことのぶどうの木であることに感謝したいと思
います。この方がおられることこそ私たちの望みです。この方に結ばれて私たちは今日こ
こまで養われ、導かれて来ました。その方に感謝しつつ、ここで命じられているように、
これからもこの方にとどまり、この方がくださる豊かな命に養われる教会の歩みを続け
させていただきたいと思います。それは具体的には主の御言葉がとどまるように取り組
むこと、また御心にかなう祈りをささげて多くの実を結ぶ者とされること、またイエス
様の戒めを守って愛の中にとどまり続けること。そうしてイエス様が「わたしの喜び」
と言われた、その何にも勝る喜びに生かされる教会の祝福へ、また多くの実を結ばせて
いただいて父なる神に栄光を帰す教会の栄えある歩みへこれからも導かれて行きたい
と思います。